

に、少しでも三輪女に関する史料が集まることがあるとすれば望外の喜ひである。疑問点も少しは解明されるに違いない。

注

- (1) 愛知県立女子学校校友会編発行 『尾参婦女善行録』 一九〇六年
- (2) 岡田啓 野口道直編 『尾張名所図会』 後編卷一 復刻版 愛知県郷土資料刊行会発行 後編成立一八八〇年
- (3) 小寺王晃著 稿本『鳥の巢集』 岩瀬文庫所蔵
- (4) 市橋鐸著『朝野三輪女』 一宮高等女子学校校友会一九二七年
- (5) 市橋鐸著『古俳人掃苔おぼえ書』 私家版 一九六四年
- (6) 市橋鐸・服部徳次郎編『中京俳人考説』 『愛知県文化財叢書』 七一 一九七七年
- (7) 愛知県教育会編『新編愛知県偉人伝』 復刻版 愛知県郷土資料刊行会発行 成立一九三四年
- (8) 浅井啓吉著『細井平洲の生涯』 私家版 一九八五年
- (9) 岩田隆著『東海の先賢群像続』 桜楓社 一九八七年
- (10) 浅井啓吉前掲書
- (11) 「加藤磯足内達書」 一七八四年 林英夫著『近世農村工

女の史料

「舟路往還記」上

(翻刻) 東京桂の会

(会員十四名)

昔は人乃伝授一子彦佐の如く
年々長くあつたにせよ
そのそと一都府にいたるに
大いにかゝる又、伊勢のまゝ十路の
れりん神れ市やふいれり
けりけり五ふりて
旅衣もひし日つとて
久留りたりあふれりつとやれはみ

業史の基礎過程」(青木書店 一九六〇年)に翻刻収録

(12) 加藤磯足『磯のより墓』長歌下のうち 尾西市歴史民俗資料館所蔵写本

(13) 服部敏良『加藤磯足―その著作と伝記』芸林社 一九七四年

(14) この句は(4)の扉に三輪女の筆跡の写真が載せてあり、「悼」と題されている。可卜の追悼句かも知れない。

(15) 以下の一節は(4)の「その五」から要約引用

(16) 小寺王晃前掲書

(17) 市橋鐸著(5)の書に載せる。

(18) 右に同じ

(19) 右に同じ

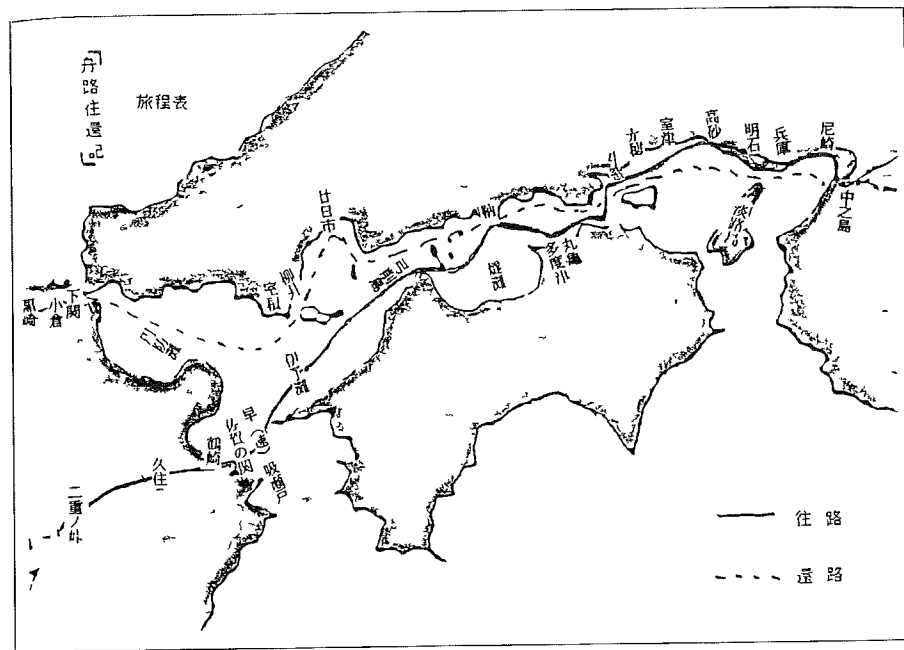
(20) 市橋鐸著(4)の書「その九」

(21) 右に同じ

付記 本稿を書くに当り、史料提供については関戸弘子氏はじめ関戸家の方々、史料探索について林輝夫氏、三輪女と角露の句の解釈に松崎潤子氏のご協力をお願いした。厚くお礼申し上げます。

〔住所〕〒494 愛知県尾西市北今西田面二ノ切四〇―四

昔の人の住捨し一草庵の軒のつまに年経て忍ぶつはくらめの志深く思ひ暮せし都の方にいさといふ人にいさなわれて大内のはとり又は伊勢の国五十鈴河に身をきよめて おほん神の御みや所をおかみ奉らむかたしけなきに立出けり しはしかほと旅衣もひと日ふた日とたちてふたえ山久住のたうけくろと郷とかやおほかみもするらむ深き山をこえて 国の君のしろしめす豊後の国鶴崎にいたる 松たてる門おかしう住なせる人のかりとひてやすらふ 折よくて行かたに出ぬる舟あればやかて其舟にあなひしてうつり乗待りぬ いつか故郷のかた恋しうこゝかしこみせまはしさの心にはま千とりのあとおほつかなくつけまよふもかたはらいたしや それかしのとしの卯月のけふはもちにそありける このよ月の晴曇するも所からやうかはる心地してけり 十六日のよもおなし湊にかよりぬ 十七日昼潮の干かたにおりたちて蛤ひろふ爰かしこにまろひいてぬるをとるにおもほへすはるくとすゝみあゆむ めなれぬ魚とりてめつらしとのゝしるもありとかくして潮のむかひぬるといそけは小舟に乗てかえりぬ 其夜月清くして舟を出す 灘中より風あしく吹とて十三里もととりて佐賀の関といふ所にとまりぬ よもすから舟人たちはさく ふねはたゞゆりにゆられてこゝち常ならねはふしぬ



さきに出立れし志水何某大慈禪寺の舟々もたちもとてお
なし俵にかゝるぬ 十八日おかにあかりて湯をそゝきてこゝ
かしこ見ありく 此地の鎮守権現の社にまふつ 石の鳥井高
くあふきてあゆみ行は右のかたに他あり かきつはた盛にし
てこき紫に流もそむ計なり いたふこうしたる折なれば涼し
くめつらし 石の橋をわたりてみきりにすゝむにおかみとの
神のみあらかあり うやゝしく宮居ものふりぬ これなむ
はやすふの命と申奉る ゆきゝの舟やすかれといのる 灘の
名も育黄とよへとまことははやすふといふとなむ

はやすふの灘こえかねて舟人のさかの関にとけふはより
くる

みなく夜ふけ静まりぬるころよりおかのかたにあらむと
さわきたちて若き人々小舟にうつる 中に年たけぬる人の有
しをすゝむれといなひぬるをいなどいはずしあてともな
ひ行むととみにまろはして小舟にうつす おと高きこえて
今や毎におちいりなむとおとろかれぬるにやかて櫓こぎたてゝ
いてぬるもおかし 十九日舟よりあかりてけふは黒白のはま
みむとてわりこさゝえたつさへて人々あとや先に賑はし ま
つ神のます広前にぬかつき奉りぬ わかき人々はちかきあた
りのうかれめをかひまみて何くれとほのめくもおかし やま

みちにかゝりゆけはまつ蔭の涼しきあたりにはためらわすゝ
えおろしてさかつきとりくにいこひかちにのほる 尾端ナ
にはたうとき地そうほさつのおはして舟路のあやうきときは
火をともし給ふと人々いへり 其尾端ナはうえよりぬかつき
て牧をみる 此まきは中比たえたりしを此ころおこして牛馬
をもはなちていにしへのまゝになりぬとそ 爰より浦つたひ
せむといえは道のほとかたしとてまたかへりのほる 登りて
大黒の浜にくたる 下りつきてみればあまのいそや間遠にし
て人も音せぬ家もあり おもひし小貝のからもなければいそ
きたちて小黒のはまに行は下り坂にのそめり うえよりみれ
はたちならふ芦のやの中にも八重ふく軒の下すたれひまあり
けに静なるたゝすまひの床しきにとひよればあるしもこゝろ
あるさまにもてなしぬ いかなる人にやとえは此浦の下も
る人にて渡辺の何某とかいへり おなし国につかふる人なれ
は心とけてわりこさゝえ取出しきくみかわしあるしも多ひ
ぬ せうかのひもといふみるなむとのたくひなるものをたか
つきにもりて出しぬ 君か為にはおしまさけりといえるふ
ることもおもひ出られておかし せちに浅からぬけはひ也
さかつきをめくらしつきすくみぬるほとにやをらすへり出て
浜辺に行は磯の波ひまなく立まさりて岩にくたけて玉ちりかゝ

る 袖もすそもひちまされといとはてあらめもひしきも松
のりなむとさまゝめなれぬ物多くあれはめのわらはととも
に取もて行 人々もひとりく来りつとひておのこともは毎
栗やさゝえといふもの取也 それはいは高く流よるかたにあ
るなり 紫の色こくする手もそみていかなるゆかりにやとと
はまほしきにもてる貝をみればいかくりのえみもせていかめ
しきさま也 さまゝ取もて行 浦つたひ石のおよひなく高
きひろきおのつかからかさなりまろひて道なきかたをつたひの
ほりくたりて小貝のからをたまゝひろふ 白きいさこのか
たを過る所もあり あるは千とせの松の色深く茂りあふ梢の
年ふるもいまよりの千とせのみとりうるはしく生 さきしる
くみゆるも立まじりてなにとなく生かゝる岩ほに時をわすれ
ぬ 卯の花の白くつほみかちなり 又春の名残に咲をくれぬ
るつゝしの花の紅にこかるゝ色のみとりのひまもれてみゆる
もおかし 次第くゝに伽羅のはたえにかよえる石のかさねか
さなれるかたをつたひて山にのほり下りてもと来し道に出て
舟場につきぬ 旅のやとりにいたりていこひぬれば小舟に乗
りて人々にさき立てとまりの舟に帰りぬ くれぬれば人々も
もとて賑はし 帆たなにあまりぬぬれは大慈禪寺のふねよ
りとまりのつれくをとほる 志水のふねよりもおなし心に

此みなとにかゝりぬることをけふ聞しとてつかひあり う
き船のとまりなからつらなりて懸りぬれはとひとされてた
のもしかりき 此よかたみに船のいてぬれは行衛もしらすな
りにけり 廿日夜に入て舟行なやみかこのはなこしこさしの
ころさいなみしきりにしてなれぬ舟路おそろしうこゝ地かき
くれてめのわらはとともに舟そこにふしぬ いやなやみにな
やみてうつゝとおもほえず よもすからあかしわひぬ 明
はてゝの後漸人こゝろになりぬ ものなとすゝめられて起居
ぬれはなへてみる舟にはやうかわりてはかひそう作といえる
舟なり 帆はたはこの葉のかたちにかよへる北くにのふねと
かや むかひの方をこき行 此比めなれされはめとまりぬ
廿一日ひも暮て波も静に舟行 けふそ灘こえ過ぬといへり
廿二日静なれば舟はかとりてからふとの浦に着て水を汲とて
舟人小ふねにのりて行にわれも人も皆のりて行 浜辺におり
たちて小貝のからをひろふとてとめあゆむ 此所は赤はけ
の島山にて松茂り風情いとよし 右は神明石のきさはし高く
のほり島居は前にありて石の燈籠ならひ立り 左は観世音お
はします おのつからなる石とこゝろくきさはししの風情に
してそはつたひに登る ふたかたにぬかつきても舟路やすか
れとそいのる こゝも河竹の一よのふしのきみある所にても

立つゝく波もさはらて一筋に沖の島根に通ふ細道

けふもみきくみ暮し夜はよもすからよも山のもの語りして更
ぬ 此ふねはとくより来りてかゝりぬれは波高けれとひか
れす 友ふねはよもすからゆりあひてひゝく音高し 廿五日
明行空霧立渡りて海の面おたやか也 夕つくまゝにあすはこ
んひらにまうてむといふにこゝろつかひもあなれや 廿六日
また夜ふかきにしゝのうらの舟人船よそほひて来れるに乗て
行 たつといふ所に舟よせてあかる かりのやとりをもと
めてやすらふ やかて立出て行 こゝより百五十丁とかきこ
えぬれとしらぬ道なればほと遠くおもほえぬ 山のかたち象
といふけものを絵かきしをみるにゝかよへり 其まなことお
ほしき所にみやはしらふとしきたてゝおわしますとそみえぬ
きゝしよりまさりてたうとかりけり ふしきにまふてつるこ
とよとかたしけなみなたのこほれぬ こゝろことはおよは
ぬおはんみや所にそ有ける またしらかた屏風のうら普通寺
とかやにまふつ 弘法大師の誕生ましましける所とそ 唐め
きたる堂塔からむそりはし高くかけて渡とのあり 木立もの
ふりておくの院ははるかにあけの玉かきかゝやきて茂れる
松の木の間ふかし もと来し道に出て今朝とひしたとつをや
とりにつきて湯をそゝきやすらひて舟にうつり初夜過る比泊

のゝ音いまやうたひておもしろし 人々こゝかしこさまよ
ふほとまちくゝて又小舟にのりもとのふねにうつれり 此よ
は西の風ふきつゝきて廿里はかりはしり行ぬとそきゝし 廿
三日あくるより風つよからすよわからす行とおもほえすふ
ねはゆくなり しつかにしておのかしゝこのむ所にしたかひ
てたのしめり おもしろき島山のうつり行をみる 曇かちな
るかくれかけて雨ふる 火うちなたといふ灘中にいかりお
ろしてかゝりぬるに夜になりて浪たかくからうねんすれと
わひしかりけり さらはとて五里計あとにさかりて弓削とい
ふ所にかゝる 廿四日明行まゝにみれば弓削の何某とかいえ
るとめる家みゆ みつはよつはのとのつくりかわらにてふけ
るなり 塀たかくみわたすに嶋の半はしらくゝとぬりつゝけ
ていちしるくからめきたり 出入人おほし 外はいそやかち
にてあひにあたらしきもみゆれとめうつしにはわひし こき
出て行にむかひに松おほくたてり 磯ふかく神とゝまりまし
ますかや 木かくれて島居たてり すはましらくゝと広し
ひとえの山にてもなくまた其きはよりさし出し茂みの山もみ
ゆ 磯の石たちならひて海の半までいきこの道あり 石所々
におかしうつゝきてみるめふかく絵に写ふるも人にもみせは
やとおもへとまかせぬ筆はちからなし みつゝ過行をおしき

りの舟に帰つきけり 廿七日朝より舟を出す けふも曇りか
ちにて舟はかゆかすみゆ まろかめの城下三本松も見ゆ さ
みのしまよしまのあわひを行 水島の沖にかゝる 潮よくな
りてよもすからおす
夢にみるふさぎと人の面影もたえてさひしき波の明ほの
廿八日夜明かたさぬぎの手しまに火あり よへより朝までお
す 潮あしゝとてかゝる雨降出て俄に舟をいそきてうしまと
のうらにゆく

雨になる舟路は風の出ぬ間と泊りをいそぐしまとの浦
いそき着ぬるにさえきの舟のかゝり居しは潮よしとてやかて
こき出ぬ たいこかね打鳴して船はぬりたるもぬらぬもある
かまくしほり行さまにきはし ふかくこうしたる折かなれ
はいとはれくしくおもほえぬ 雷とゝろき雨しはくゝふり
て西の風に雲はれわたりこゝちよし 舟出なはけふあすのう
ちにあかりなむといふにこゝろつかひおほしや 廿九日空す
みやかに晴て追風出んといふ 朝鮮の人の旅やかたみゆ 塀
は竹をひまおほくうちてすきたり おはしまたかく障子たて
つゝけて浦のとまやにことなりてめつらし 瀬戸には燈籠堂
あり 島山の気色おもしろし

牛まとの名もわすられて風はやみ真帆に出ぬるけふの友

こきいてぬれは波は日の光に映して沖のかたよりこかねの花
 ひらのちりにちりてみたるゝとそみえし ゆむ手はさこし
 めてはえし 風よくてほともなく舟とめてはし舟さしよす
 れは乗うつりてさこしの磯にあかる しはし山のこしをめぐ
 りてむろ町に出ぬ むろの明神にまふてぬ 陸にあかりて心
 よくあゆみぬるもうれし あなたかなたみめぐりていま牛の
 初ならんといへはしよしやにこゝろさしおもむきぬ この道
 に津のみやとて大社あり いつこともしらぬさとく岡山を
 こえてゆくになにわの人とてあひぬ しはしかほと打つて
 そこかしことをしえぬれは見つゝ行 漸しよしやに至ぬ の
 ほりぬれは女人道あり 禁制としりせは来るましをいたつら
 にこうしたることよとわひしくかりの宿りをとひてふしぬ
 晦日とくより出てそねの天満宮石の宝殿にまうつ 生石子の
 命今一かたはわすれぬ そねは拝殿あり みあらかにはとく
 色の金欄のへりとりたる御簾おろして天井は四ツにわりて
 黒ぬりのふちうちて金はりにして龍なむとのかた書たり 左
 のかたにならひて殿あり みな金はりにして絵かけり 松は
 いかきことに広くゆひまわしぬ みれはふとくまかりたるみ
 きのあまりたかくはなくて枝のしたりくすゝれひろこり

ことの葉もたえてなみ居つゝ詠るにふるさと人もいと恋
 しろ小石いさこなむととるもせめて家つとにせむ 水すうみ
 なりや 松かねにゐよりて日を送らまほしくおもふなり い
 さこのつもりてたかく成たるなれば雨風にすゝれ落て松かね
 は高くすきてよそにみぬさまにうらのみるめも立そひいとた
 えぬこゝろをなくさめむに物なし

人とは何と明石の浦とをく浪もなきたるけふの海原
 淡路島むかひにみゆる 一里といえと舟人のものいふもきこ
 えて遠からすおもひわたりぬ 枝さしかはし立つゝ松の下
 道みやらるゝはすまのかたなり

行末は松のみとりにうつもれてみるめ床しきうらの通ひ
 路

山より滝の音して水の流て海に入もあり 浦さひまさる磯辺
 をつたひくゝて行

いかならむうら山松の浜つたひ明石の秋のよはの月影
 なといひくゝて行かたをわすれたり またおのこのひとりす
 さ具して来れるあり 同し心にやすらひてなかも居ぬ やか
 て物いひかわしいつくよりそとゝえは日の向の国よりとこた
 ふ 我はひのうしろの国より来たりてけふもろともに明石の
 うらをみむとはなと打かたらひて時うつれば彼人は舟にのり

さしそふ枝かすしらすさかえて其風情たくひなくめてたし
 茶をうるたなきよし池もあり 水といふ文字のさまにかよひ
 て橋もかゝれり 杜若おほし 高砂にまうてぬ 高砂の鳥井
 外右にはしほはまあり 榎門を過ればまひ殿神のおましの左
 にあり 相生の松はあか松黒まつひとつにあひて一木となり
 ぬ うるはしくさかえひろこれり 尾上にまうつ おのへの
 かねはまなこのさうしのおさめ奉りしとそ からのかねには
 とけのみすかた鑄つけて常のかねとはことさらにかわれり
 なり出むをとこそゆかしかりき むかしの相生の松はふりた
 るか式尺計にしてふるく手なれたる木をふたつ取出し僧のよ
 そ人にみせられけるをわきよりそみし 今の相生の松は若し
 うら門よりいてゝ刀田山鶴林寺とかいふにまうつ 年ふり
 てたうときてならなり 堂の前をよこぎりうらもんより出て山
 口といふ所に行 道すから人にとひくゝてたそかれ時につき
 ぬ 宿りをとひてかり枕しつ 朔日とくより出たちてけふは
 明石に至 道のほとに人丸大明神の社ありと石たてり 拜し
 たてまつらまほしくよこぎり行はやかてむかひに山松のひま
 もなくなてる所に社あり 友とちの心もいかならむとおもえ
 は拜してのほらすいそきうらに出たり けふはてりもせず
 もりもはてすおちかたはそれかあらぬかとほのかにいひ出む

て須磨のかたへゆくとしてわかれぬ 舟をまねけは舟よりもま
 ねきてしはしかほとみえつるに嶋かくれてみえずなりにけり
 ゆくさきに日向大明神の社あり しほみつしほひるの玉をさゝ
 け給ひし住吉の神にてそましましけるとかや 道のゆん手に
 高き所に石の塔あり 仲哀天皇のみさゝきといえり 拜し奉
 りぬ

いにしへのてる日かくれしさとゝえは今も涙のたるみと
 そいふ

うしろに山あり 千壺とていにしへは山の姿に壺をいけては
 ちすをうへしとそ いたゝきのひとつの壺に水をそゝけはす
 そのゝ壺まで水のかゝりけるとそ この故にさとの名のたる
 みともいえるならむか 文字をしらねばさたかなることしれ
 かたし 今は壺のみのこりて蓮はたえしとそ 壺のかけたる
 をひろえはたゝりありとてちかつかすといひ伝へしとかや
 ひそかに思ひみれはこの山のいたゝきこそみさゝきならんか
 須磨にかゝれは山たかくして三の谷より二一の谷におよふ
 人々むかしのふるることおほくつけあえり むねせはく覚えて
 心くるし 行過ぬれは山路のほりくたりぬ 海すこしへたゝ
 りて松のひまゝよりみゆ

波の音も松のあらしも吹たへて浦さひまさる須磨の山道

須磨の関やのあとは千とり河のほとりとなん聞し 今のはつかの流ありて石の橋かゝれり 左のかたにかすかなる草の屋あり

今はたゝ名のみとゝめて須磨の浦の関やいつくといふ人もなし

此夕兵庫にやとる 二日兵庫をたちて生田に出る 大神宮にまふつ 馬場は桃桜交りて花の春おもひやられる 石の燈籠おほくつゝけり おほむ神はわかひるめのみことゝ申奉る 大神宮の御妹宮にておわしましぬとかや 左に梶原のえひらの梅 右に釜見の井とてあり 妹は梶原何かしの妻にしあれは此梅を一ついたゝきて送らはやとふところにす いくた河みなど河水かみは流れ有とも末に至ては水なし 広く流れし河原のみあり 山深く立いりてぬの引の滝を見る よにひゝく滝の姿いはむかたなし 滝壺のなけはいとよし くり返しもあかて立てり

山姫の心長くも打はへて幾よさらすや布引の滝 行々てあまか崎に至る 此ほとは松のとて山幾重もくこえて行なり あまか崎より暮かたに舟にのりて芦間かちなる入江をわたる 二日の月のそれと計みる程もなきに宵の明星の光さし添ぬれとおほつかなしや

つましくもてなさるゝに立出むともはたおもひはてす されと日さたまりて出たてはあるしかたの人々も皆立出て名残おしみつきす いひかはして扱わかれぬるはつれなくわひしかりき

忍へともこれも別れのことわりにとまらて落る涙なりけり
そのよは舟を出さてとまりあぬ 何くれと思ひわひて夢もむすはす

憂寝する枕の下はよもすかななるゝ水の音のみそきく 二日こき出てあち河にかゝる 中の島のほとこき行に我やりしかたの前を過る おもての格子簾押上て手を出してまねく 取々詠出て物をもいはまほしきはひのみゆれはいとゝ恋しうみやらるゝに舟はこゝろなくいそぎ過行そうかりき 別れ行戻ひかたき袖の上にかゝるもわひし秋の夕波 あり河につきぬれは舟人ふねつなきて出行 今宵もこゝにかゝる 三日またよふかきに船をいたす

芦よりも茂きなにはのみなとふねさはりて遠くこき出にけり
この比びよりまちぬる舟々いつよりも多かゝれりとそ 河口出はなるゝ比漸明はてゝ打ひろきたる海に出る 朝もよひた

みすもあらずみもせて今宵あかほしの光にたどる難波江の舟

暮はてゝそこもしらぬなには江や舟こきまよふ芦のひま

人はみなふしぬれと寝もやらて名にしおふ所からさたかにみまほしの心やます ひとつとなく行ふねのとゝまりて皆人のあかりぬれは打つてあゆむ ほと遠からすしてねひとつはかりもあらむに中の島につきぬ ともなふ人の相しれる何かしのかりおとつれぬるに とほそおし明であるしのいとめつらしといふにかりの宿りともおもほえすさしいりける

水無月の末の三日ともなひし人々の京に残れるも難波のかたに来りて初めとひし宿りにゐにけり たよりの船もとむれとも思ふやうにあらで日をふるに筑前の国黒崎の住吉丸とかやいふ舟をもとめ出けり 舟人みたりははらからにて今ひとりその他の人なりける たのもしき乗組なり 此ふねよそはひて故郷にいさかへらむとあなひすれは文月朔日出たつ

折しもあれ今朝たち初る秋風の吹くるかたに帰る涼しさ我ひとりとは先たちて故郷より難波に來り仕へて代々するふるき友とちのかりに來り宿りてゆきゝはつか計あなしみてむ

ちおほひてなにはのかたはみえす 日さしのほるにしたかひて波も光あひて朝風に舟ははしりていききよし 次第くゝに浪あらく風のこゝろもまさるからにこゝち常ならねは枕にゐよりてしはしまとろみぬるに などみぬや須磨はあとになりぬ といふ声におとろきいてゝみれは一二の谷そむかひに見ゆる 今まひこの浜みむと思ふにたゝひとまたゝきのうちにみえぬ 陸よりみしにかはりてさのみなければひきいりふしぬ これはこれこゝちのつねならねはこゝろのすゝまぬにやと思ふ 明石のせと打過て明石と高砂のあわひにて風のなきて潮あひあしゝとてかゝれは起出て人々のかたらふにまきれて四方山のこときこえかはしてあるかうちにいかりあけはやなといひて舟人のいそけとなにゝかゝりしやあからす西の風おりく吹て舟々すゝます みな帆をおろしてみゆ つくしかたの人のみ乗たれはおもふかたより風ふくにやなといひたはふれてかゝれる いかりをせひを出し力をつくしてひけとも千ひきのいしにやかゝりけむ ちからおよはぬ氣はひなり 船長も思ひうみて筑後の国瀬の下といふ所にあま御前の守りとして水難にいちしるき守あるを取出てはたひきといふつなに大きな碇石遠つけてしつめて とかくする程にすらゝとつゝかなくあかりぬるこそ有難けれ ふね中こそりていたゝ

きよろこふことはなはたし のむとに魚のほねのかゝりたる
に守りの文字を一字きりぬきて用ゆればたちまち抜けぬ 又
難産にたゞ中の文字を用ゆればたいらかなりとかや 帆たな
にあまり山々島々をみる かしこそ高砂なりときこゆれば

はるく／＼とけふはそなたに白波の懸てゆかしき高砂の松
むかひにちいさき嶋かいしかとみゆるはいつこそと／＼へはか
めしまといふとなん

め嶋
よろつよは神そしるらむにしの海の青きか原にうかむか

風よく潮よくて海のこゝろ静なりふねそゆく

静なる秋の夕風帆にみえて灘こす舟の上ぞ涼しき

なといひて詠るに時うつればそれかあらぬかとはかりにほの
めくは初あきの新月なり いづらといえは人のゆひさすにそ
みし

暮かゝる雲と波とのにしの空に秋の光をみかつきの影

くれはてゝよもすから風にはしらす 帆をまきつけて舟人は
いねふりもせすふねをやる ひよりよければとまもふかす臥
なから空をあふきて星をみる也 すはる天上夜八合なといふ
をきく 実これそ昂といふ星なりとかや ほしのめくりは月
よりもはやしなといひあえり 四日明はてぬ間は霧たち渡り

長し 初てあまの家居あるをみる 山ひとつへたてゝ又白き
浜あり 爰に田畑つくるみえて家はなし むかひにかんくひ
のせと／＼いふあり 此せとをこす

やは
かんくひのせと過行はさはの海や吸口の嶋もとをらまし

なとたはふれはえり この所は遠近の山つゝきて気色おもし
ろし夕月よし

ほのかにもみしみか月のゆふへより光添行影を涼しき
五日明ほのに起出て海の面をなかむれば霧深くしていつくも
く／＼ほのかなり 次第く／＼に海よりあけてさま／＼にわかる
舟人のそのしきは備中の水島むかひにちひさくならひしは
ひさくのしまといふなりときこゆ

けり
はかりなき千尋の海の水島にひさくのしまもそひてみへ

風やみえけむ帆をまきて櫓をたてぬれば此嶋めてにみえて行
又ひとつましかくうかみ来にけり 遠くみえしにはまさりて
大きに岩ほのかたへに人のあけたらむやうに丸き石のあかり
てあやうけもなきけはひにおかしきかたちなり みればあと
のかたによりてすきき半よりこして長くなれたれはみるめ
たちまさりぬ やかてこれもあとになれば又ひとつの島を出

て嶋山も見えねと赤穂は過ぬとそきこえぬ 漸日も三さは計
のほりぬれば皆人起出てひとつ／＼物云出ぬ ふるさとの夢
みしなといえは我もしはしまとろみしや ふるさとにかえり
て人々にものいゝしかとおもふ

故郷に帰るとみしも恨枕かけてはかなき夢のうき橋

島山うちつゝきてめなれしもめなれぬもめつらしとみるに
犬嶋といふ島みえぬ いつも年の暮のよは犬のなく声きこえ
ぬるとかや 石となりぬとて嶋のいたゝきに石みゆ松も其石
のかたえに生て尾をたてゝ走るににたり

白波を今も守るや有しよのかたちは石となれる犬嶋

昼のうちは船の中もたえかたくあつきに潮かゝりして居ぬれ
は浪のうをやくらけむと行かふ をちこちにみえぬくらけ
は水月と書る むへもよくかよへるものなり 日影さへくま
なくさし入はなやみかちなるに夕かたつく 風に順ひて帆を
まきさけて櫓をたてゝおし行に心ちもさはやきて帆たなにあ
かりよもの海つらをみて納涼ぬ めてのかたにちいさき石の
上に又小石つみたるやうなるは何とかいふ所そ と／＼えは出
さきの枕いし といふとなむ それよりなたらかなる嶋つゝ
きてふしたる姿にやみなしけむとおかし ゆむ手は間ちかき
嶋山立ならひてすえなかくつゝきたり 白きいさこの浜広く

来る 此島は初の嶋より少大きにしてさきになかれすあり
あとにも沖の石のおほくつゝきて道をなせり 波のこすへく
もあらず さてはこすましともみえぬさま也 嶋山のあとに
よりて岩ほの中の明たる所よりむかひのみすかさるゝあり
此嶋かけより帆をかけたる舟の静に出くるも興あり 前に石
つたひの道長くつゝきたるしもに又ひとつの嶋出ぬ 此あは
ひ長くして海を二重にみれば舟々もみえかくれていと／＼みる
めふかゝりき 乗たる舟を行めるときはおもほえてえもいは
ぬ嶋山のなかれ行とそみる 舟うちこそりて物をもいはて詠
おりぬ このおもしろき気色もあと白なみとなりて蒼々たる
広き海つらとなりけり 実よの中のありさまめの前にあり
とおもひおりぬ それ過て又行は三郎といふ嶋ありといふ
みれば三ツ打つゝきてはなれもせずみゆ

たか子そや青海原にやす／＼と産ならへぬる三郎の嶋
しら石のせとむかひにみゆる ゆむ手の山々長くつゝきぬ
めてのかたも山あり 其末は遠山につゝきてそみゆる 帆を
かけたる舟をおほく行かよふ

かたはしもうつす筆なき心にはせかれてそこす白石のせ
と

こき出るまゝにこれも左につきて間ちかき嶋山立つゝけり

みなかはらけ色のいさこの高くつもりて山となりぬれば尾上よりすれかゝりて並木の松のみとりのいろといさこの色のあひにあひてみるめまされり 磯際は波のあらひていと石のみ出ておのつからつまかさなりしかえもいはすみるめおやはぬさま也 いさこ計のはまもおほくあり 磯より遠くまろひ出し石のかすくあつまりたるにかもめといふ島の水にかみたるも石にあかりたるもむれつゝまふも間ちかくそのしまかけにかゝれる舟々にも人にもおとろかて島はあそふめり立るるもひとつ波間に所得て沖のかもめの遊ぶしつけさ打つゝきて石のかさねかさなる嶋に松も生たるか海の中にさし出てあるに浪もあらさぬ道ありとそみゆる 此打つゝく山の奥には弘法大師の住給ひし堂もありとかや むかし高野を爰にせむとおもひ給ひしかやいひ伝へ待ると舟人のかたりぬ 右のかたも同じ山つゝきなれと少遠くみえぬ なたらかなる山の姿おほしなかはより沖に少出て間ちかくみるはかまとなむとのことくつみたる石の長く流れて海にうきたるやうにみゆるもやうかはりてみるめあれや 備後の地に入 はしり嶋は左 ふく山は右 泉水島はむかひにみえたり ともの湊の前とそ聞し

帆をかけてやかて沖にそはしり嶋ともにつれたつ舟をお

ほけれ

けふは薄くもりてあれば浪はほのかなる日影のうつりて白かねの色に立行 銀河に舟をうかめてさかのほととおもほえし 雲の上の星の渡りもちかけれはいとゝしきみるめなり かさみといふ蟬の手をかさして波をわけ行 備中のかさおり山ちかき山とおき山のあはひに薄霧かくれほのかにみゆ 雨ふらてつゝく日より灘こせはかさおり山もよそにこそみれ

備後の泉水山を過る この国の絶景なりとかや実きよらなり 島々山のかたによりてそはたつ ひまゝうみとをりてみわたしはせはくみゆれとほをあげたる船々のさはりあらて行かよふ こゝもとはとこ瀬なれは いつもかはらてみきはの絵にかきたるさまにきはたていふはかりなく清し 松茂くそなれたるは筆にも中々なりや 七うらあれはいつくしまの明神も此地におましあらむとあれと二うらたらすとかや 嶋々多これもかれもからめきて絵にかける洞庭湖なんといふへき おもむきあり 嶋山の間いく筋となく海とをりたるいとよし うしろの山は波たちつゝきて茂れるもあり いさこのみゆるもあり うしろわきのかたをこきめくりてともといふ所に入ぬ 朝鮮の人來りて山のかたの高き所より眺望して日本第

一の勝とかきたるふみありとかや おもしろき所から也 されと朝鮮の人は長崎より漸このあたりまでみぬればささいひけむかし みちのおくの松しまむ思ひやられぬ 爰もこと所にかよはぬ佳景なるへし 湊につきぬれば皆舟よりあかりて湯そゝかむとかりのやとりをとふ 湯をまつほとこのいとまに舟より見あげたる嶋山にのほる はなには所を守る人有て燈籠なんとあり 其となりに円福寺とかいえる天台の寺あり おのつからなる石の階かすくあかりて山門におもむく わきのかた松いくもとゝなくなみたちたる 下のすゝしけれはいさこに座してすゝみて浦の気色を眺望しける 本堂のかたに行と人のけはひもなく静なればためらうに奥のかたより六十餘りの僧のやせくとして墨の衣きなれておもひすましたるさまして出られしにあなひこひてみほとけの前にまうてぬ 障子おし明て庭をみれば松おかしう植てたゝちにみえわたる うらの気色をかけもてなしてつくれり 此所にはせをの塚とてたてり そのもとに白本あり 句作あらは書とゝめよとかゝれたり はせをの塚は大津の義仲寺に有しかいつれ是ならむと僧にとえはふたみのうらにて

うたかふなうしほの花も浦の春

とせられし句を取あわせて此道にすぎものとの青き石にゑ

りつけて塚とてたてたるなり 爰には來られしやもしらす

九州あんきやせられしやもきかすとそ 風雅のなすところにはあらんか あたらしきこそうらみなれ 爰かしこおかみめくりて湯のあるしをとへは今よしといふにそゝきぬ せはくいふせければあつさにたえず 舟にのりてすゝみせむと帰れば浦風つよくて中々乗へきやうそなき そこにわざとすゝみ所作りて人々のすゝみいれてぬぬれは我も行て人々にゆるし給へ いなかうとゝてこし打かけて風をいるゝに浦の秋風吹あけて例のつくも髪顔に吹かけてたゆみなくとてもすそも吹にふきて涼しければうさをわするゝに時うつりぬ 風のおやまで舟にのるものかなはねは此よは爰にとまりなむといふにさあらはちかきあたりみんとて所の鎮守祇園社にまうつ町つゝきしはし行て石のきさはし高くのほりて拝殿にぬかつき宮居をめくる 左のかたよりめくれは石のきさはしを下りて末社を拜しぬ 一の社は八幡宮二の社は額もなし いかなる神そと遊び給し めのわらはにとはえはおわたすの明神とそこたえし 其外にもほこらの二ツ三ツおわします おわたすの明神の前に石の階あり おりつゝ見れば額あり 渡守大明神と書り さと人のいひならはしておわたす大明神とはいふならむ 樓門の左に神馬もつなけり 又石の階を下りて右の

かた一の寺にまうつ 小松寺といふ 小まつの門のおとゝの
手つから植させ給ふといふ松あり よく栄へり 下に塔たてゝ
香花をそなふ いかなる時に来り給ひて植おかせ給ふならむ
よしをしらねは 人のいふにまかせてぬかつき奉りし 又も
と来し道をもとりてむかひの浜辺にゆかはやとこゝろさしす
さひと具して行にむかふより友とちの今遊君のさとをみて
帰るといふに出あひぬ とともに打つれて浜辺に行 町たちつゝ
く程大かた行尽して東に行ほとに浜辺に出たり 北国の舟々
も暫りあぬ かのはかひそうといふつくりにして常の舟とは
かはれり いつれも大舟なり 夕さりかけて火たきて庭をや
きぬ それはそれにて浜つたひ行はあまのいそやも数々有て
すさきの出たる嶋山あり 上に明神の社とて有 浜辺よりの
はれは松か根のあかりて階のやうなるをふみ登る 拝殿神殿
あり ぬかつきてみたてまつれば神はいまます きくめん石
なんと云さましたる浪にされたる石などそあなれや
いつことも神のおまは白波やされたる石をとのもりに
して
又くたりて浜つたひ行に浜なてしこのひとり色よく咲たるめ
つらしくみえぬ もとの浜辺に出て舟にかえる 風も漸静に
なりぬれはうれしと思ふ みなゐよりて初夜過る比まで起

る船

まきりて舟をやれば左右きたまらず 弓削の山ちかくのる
たちならふ磯屋も多 しほやく浜もあり 此所山みとりにし
て松かしはよきほとにしけりてみところおほし 磯の浪のあ
らひて石のおほくそはたちたるもみるめ深きさまなり 風は
おとするはかり吹て空はすみまされるに白雲の打はえてたて
る秋の色さやかなり

秋たつや空に白雲うらの破

ひたとまきりてのほりに見し弓削の何かしの前を過る ふたゝ
ひみるもめつらしとそおもふ いよの松山嶺とかいひしうつ
りかわる嶋山景色おほし もしほくむ家々もならひて磯きは
にはおもしろき石や松の生かゝりたる所もあり 大かたは薄
白赤きいさこのすゝれかゝりて筋立たるにさまゝ生ぬる木々
の立のはて所々みしかくしけりて興あり さし出たる島々も
みないさこなり あまの家居も處々にみえぬ まきりゝて
いよのいはきといふ所につく 爰も家居あり うしろに高き
山あり やまの半はにも家あり よくすみつきぬる所とみえ
てみなとには船々かゝりあぬ 白ぬりにぬりたる葎おほけれ
はとまやのみなる中にはみるめとめり しはしか程静なれは
いねふりふす

あぬ 夜半はかりより風しきりに吹ていかりおろしそえはし
舟おろして風をいとふ あくるに随ひてしつまりぬ 六日は
のゝ明行 しつかなれは帆つなをまきて備後のみなとを出
て行 残れる島々みつゝ過行 此あたりまで磯きは清くして
潮ふかし皆山つゝきなり きれとあり 観世音それなりとい
ふ 堂もみゆとて皆人みる 葎屑かきつむるあまは筆さし置
はとおくれてそ見し しはしかほとはみえかくれしぬ 又打
つゝきて山より外は何たる所もみえぬにふもとゝふもとゝの
あわひに人さとみゆるあり いつくととへはたしまといふ
又ふねのむかひにひとつの島みゆ もゝ嶋といふ 桃のかた
ちにかよひて半は青し 田嶋に田なし もゝ嶋に桃なしとい
えりとなん

毎山のつゝくみるめにめつらしくたなき田嶋の家居をそ
みる

みなもとの奥床しくも流れ来てひとつうきたる仲の桃島
西の風しきりに吹は舟こきなやみて桃島のあたりをこきめく
らして せとをこさむとて弓削といふ所の地かたによりてと
かくしてまきり行とも潮も干ぬ 思ふやうになければ屏風を
たてたるやうなる高き山の下にかゝりて潮まちぬ
うまくのれみつけ出せし桃島をはなれもやてこきめく

風きよき湊の舟のかち枕うさをわするゝ破のうたゝね

七日起々舟を出す けふも同じ風の心にて舟人つらしとわふ
ひかたにしといふ風にて十年に一度吹なり おりあしき此
時に来り逢しそといひおえり 岩木のみなとこきはなれては
なくりのせとをこす 右も左も立つゝく山ひきくで山こしに
遠山もみゆる 又山とゝのすそとたえもせすたいらかに松
のなみ木はらゝと生て千とせのみとりあらたなり

おきつ破こきて契りや深みとり山とゝの中の松原

つらき名の岩木の候こき出てこゆるもうしやはなくりの

せと

此あいたにかんとうの嶋といふあり いにしへおそろしきも
のゝすみし所とそいふ

四つの海おさまれるよの今も名にたつ白波のあとの嶋や
ま

いはかきしめて四方の守りかたく住居けるとみゆるなり 今
は松のみ生てすさきのかたにつゝきたるかみるめとなりぬ
其すゑの高き所にちいさきほこらこそひとつあり いかなる
神をいはひまつりしや けふは七夕とて浦人もいとまあれや
牛おほく牽つてあらふ 又わらはとちむれ来りて遊もあり
牛をはしらせ背に乘て水中を行かへりするも何やうからすな

くさみぬ

星合の夕をいそく手向にやうしほのうしをあらふ海士の
子

この日昼比余り風あしくして船中たれもく臥 舟も波にの
りてはおち乗ては落するに皆人あひぬ おもしろき嶋山もあ
るらむなれとみもやらす ほしまつるへきこちもなし

音たてゝいよの海ふく秋風につくしにかえる舟そたゝよ
ふ

あきのみたらひとふ所にあかりて湯そゝきて初夜過る比と
まりの舟にかえりてものなとくひてそゆるふこゝちのいてき
ぬ 夜半はかりに山のあなたに火あり 火はみえすけふり立
わたりあかくみゆ 明てみればやけぬる灰ふりてあり 八日
またきあけぬうちに舟を出す けふは少し空の気色もやわら
きてみゆ みたらしのとまりをこきはなれてはるくくと沖に
出れば遠山のみにしてこの比めつらしく気もはれて眺望かき
りなし かゝる所にきてこそ天地の広大なるもおもひしらるゝ
眇たる蒼海の一粟とはむへなり 思ひもたえて詠おれり

行舟数もしられぬわたの原ま帆もかた帆も風にまかせて
尽しなきみるめなり 風なこやかに吹て舟はかとりぬ おん
とのせとをこえなむといふ まえに大きな魚の尾ひれもみ

三木はくろこうはいの色にゝほひてみとりなる葉の茂りあひ
て絵にもおよはぬさまなり あるはちいさき松生て松のはの
みとり茂くみとりの色に白き岩島半はつゝみてみゆるあり
あるはとしなへに長く平なる所に松のしけり立たるもあり
すはま所々に清くうるはし 朱にぬりたるほこらのひとつ
初てみゆるは七多ひすの一の御ましとそいふ 打つゝきて岩
ほもすはまも多松も老木若木立ましりておのつからおほしう
気色たつは中々ことのはそなき みせむそはたち茂りてふも
との嶋山處々おもひかけす立ならひてすさき長く舟よするか
たありて石の燈籠数しらす 一筋にあげの玉かき松たてるす
そのゝかたにみゆ 磯つゝきこき廻りて行に所としてみるめ
すくなきかたそなき むかしは海の中に鳥井ありていとゝた
くひなかりしとなむ 今は竹にしめはえてたちある舟をとゝ
めてあかれは目もにしかたふく いそきまうてむとす 岩
かきしめし磯のかたをあゆみて陰たかき松の老木のなみたつ
下を行 漸宮居ちかく成ぬ いさなふ人々のおくれしも来り
つとひていさもうてむとて水をむすひくちそゝき手あらひき
よめて廊を行 ひとりのかたに宮人とおほしくて並あぬ 神
のみあらか光添てかうくしくまろうとの宮とかや申奉ると
なむ先ぬかつきて廊をめくる 右に左にかよひ行たるかたそ

えて色は黒牛のやうに波のうねくこえて行みゆ 何ならむ
ととえは長すといふ鯨なり 常の鯨はひれなし 長すはひれ
有てあふらなしといふ しはらくして浪にまきれぬ 七尋は
かりもあらんとそいふ

わたつ海にひれふりたてゝ沖津波かつくいさねそみるめ
おとろく

日はなやかに海の面えもいはぬさま也 次第に磯山ちかく人
すむかたもみゆ 爰は陸のかたのかよひもあるへきとはみえ
ぬ磯際なり

うきもかる小舟のほかはたよりなき嶋にもたえて人の住
ける

この島つゝき過行は又塩やなむとある 磯やつゝきし所もあ
り めてにも家居のみゆる所あり いづくそととえははつか
市なりといふ せとちかくなるまゝにちかくと石なむと島
山のさまいふ計なし おんとのせとゝいふはいにしへ平相國
の島山をきりひらきて海をとをし海路の難儀をすくひ給ひし
所なり けに袋のうちに入たるやうなる入海とかいふへき所
にてせとこすへきかたともみえぬにこき行まゝにいかなる舟々
もさわりなく行かたのあるそ有かたき 潮はやくしてよく行
左右磯際は岩はたち嶋々山もありてみな赤松のみ生ぬれは

なき宮居はみつ瀬のさし入て日々にあたらにそゝく 舟々も
ひきいれて所々にあり 島居のかたみわたすに海の面まんノ
ゝとして日月をうかへまひとのおかみとの神のみあらかいふ
計なし 今までぬかつきし宮々のみあらかとはことかはりて
めつらしき御ましのさまなり 東西南北のゆきゝあるはそり
はしあるはたゝちに板を打たる あるは石たゝみのわざとな
くしてそどもの道にうつる 入ては出る道をたとり来りては
かえることをわする かねの燈籠かけつゝけて夜もたとく
しからす 美麗かきりなし 廊にはみなおはしまあり まひ
とのゝさきにおはしまなき所たゝ一ところあり 爰にて月を
もみよもすからねんすをもせは心もすみわたるへしと思へと
いそかはしければむなし 出てひとりのかたに千畳敷といふ
所あり 端山のいたゝきなり のほりてみれば五重の塔あり
千畳敷の台あり たゝ大きな計にて外にみどころなし
海つらもみえぬれとおもふ程の景色もなし それより又いたゝ
きに口のなき堂あり あけにぬりてめぐりに玉かきあり い
かなる堂にやあらむ おかみ奉らむもよしなし くだり行道
は芝生みとりなり 友とちはいこひてとゝまりぬれはひと
り下りて行 先にあけの島居たちたる宮あり いかなる神そ
とゝえはあひすにてそおはします 手洗水はかけひより来り

てたえず心涼しくみな人もぬかつくめり 次第く宮居の
そとをめぐり爰にかしこに神々ほとけの堂やしるはかそふ
るにいとまなし おかみく海辺のかたに出ぬれば並木の
松はら／＼とつきて石の燈籠数しらすならひたり行こと
遠くして尽ぬ 其先に大きさいちしるぎ石の燈籠ひとつたて
り 右は海左はみつ潮のゆきありてうちにめくれる岩かき
あり 舟もうちの干かたにつなぎぬ 弓張月の影きよく浦風
すしく吹て暮ふかくかえる 又廊にのほり神の御前に行ぬ
ともなひしめのわらはの三弦を好みて京にあるうちは専な
らひてたふとき所にも面白所にもゆかて 心を尽すことのい
とおしく覚へぬれば せめていつく島姫に奏し奉らせはやと
心つきて宮人にみつの緒のしらへ奏し奉らせむにとりあらし
やいなやとえは かたきことにこそといえは帰るに今しは
しとくめぬればとまりぬ まち給へとひて今こむと行し
を待たればかえり来て奏し給へとゆるせはほのまゝにこ
そとやかてやすらひし かりのやとりて帰りて月のいらぬほ
とにいそきてともなひまふてぬ 御燈の光明くかゝけてけし
きことにうやくしく宮人なみぬ あらたに座をまふけぬ
れはぬ直りてつゝしみぬかつきたてまつり六段のしらへ雪月
花みたれを奏し奉る これもいなかうとのわさにはあまれり

とこ潮なれば磯きはも干かたなくていとよし 白きすはま
おほく長くなかれてみるめ清し あなたかなた磯屋も有す
はうの国くばおかた右の方にみる 朝のうちは薄霧立て山々
のかたはほのかなりし なきになりて舟はおして行ははかと
らす 漸四里はかりきぬるといふに俄にくもり雷とろき雨
ふれば雨そほひしてとまふきわたし何くれと舟うち静なら
す 沖中に懸るぬれば風吹なみたて乗たる人々やすから
ぬけはひのみゆれば舟長は沖こそよかなれ いてく素人
の心やすめむとて陸ちかくよせむとおしてかうしろといふ所
のみなとにかゝりぬ 暮行は所のさまもみえず いさり火か
すくもたく火かとおもふ計火こそみえぬ 蚊おほからむとて
少沖のかたとまりぬ 夜更るにしたかひていなひかりもお
さまり風もしつまりぬ 十日明行まゝに舟を出す よへの雨
雲残りて山々にかゝる 海の面も薄霧立て朝の気色はれやか
ならねとよし 朝かれいなとすゝめられての後風雨をふきて
しきりなれとかんとりさわかてまきりたてゝ漕行 かうしろ
の民家なく爰かしこにあり 水ゆたかなるにや山なれと田
もおほく畑もおほくみえぬ 白きすの遠くなかれてみるめあ
り しはくはれて又風の雨をふきくる かくては瀬戸はこ
えかたし潮のひかたにやらんとてとめぬ 右の方干かた近

や たゝすや聞人おほくあつまりぬれとはちたるけはひも
なくおいらかにさう歌して弾をはればかえる 具したる人々
も嬉しと思ふかほ也 ましておやなる人はと思ふ 夜ふく
るまで起居ていねぬ 丑みつばかりにさはかし人音すれば
おとろき起てみれば火あり 燃たつほのほはなはたし いっ
らとくえとする人なし しはしみぬれとやかてふしぬ 九日
明より舟々出ぬれば此ふねも出むとてまつ 陸のかたにあか
り舟よそほひのいとまあれは我は嬉しとおもひてよへ見のこ
したるすさきのかたに行 みちにて聞は火ありし所ははつか
市となむきのふみしによくにきはえる所からなりしか一よの
うちにみなやけやしつらむかし 次第にあゆみ行て爰かしこ
みはやおもへと我のみ出ふねのさはりとならはの心おちあ
ねはたちもとて舟にのる やかておし出たり 明神の前を
漕行 むかひはよへみし石燈籠の尽せず立つらなり松も立な
らひて嶋のさまみるめいやすされり ともなふ人々のみよや
此景たくひまれなりといふに心うつしてめもはなたてみる
うつりかはる嶋つゝきいづれをいづれともわかむ奇なる石奇
なる岩はおのかまゝに立ならふはみるにもいふにもたとへむ
かたなし おんとのせとより宮島のせとこすまてのうちはえ
のやうにみえてことさらに風もおもむろに吹はさゝ波たちぬ

ければ舟よせて浜辺にあかる つたひ行は松おかしう生たる
磯山あり うしろは山つゝきつくり所あり 磯の石たゝみか
さねて松の生たる山につたひのほらはかたかるましうみゆる
うへより生茂る松のたはみてさしおほふ陰にやすらひて前
なる海をはるかにみる こゝなむ瀬戸の出口とみゆる 海底
におほく石あるにやあらわれたる石や岩はおほし 潮まち
して舟やらむといえはみつるまでめて小舟に乗てもとの舟に
うつる いまたひぎちの遠ければ猶とまりてぬればまち
わひぬ 潮なをりたるとて漸こき出ぬ 右におはたけ左に小
松といふ所いづれも人家ありて賑はえり 中にも小松はしほ
はま広し もしほ木高くつみてひまなくならへりいか計のし
ほはたくならむかし みつゝ過ぬればやなひといふ所みゆ
これも人家あり 沖に出るほとに千はかたけになひ嶋といふ
ふたつの島有 みむとおもえとねふたければ舟のわきに取つ
きていねふる 舟おひたゝしくうこきてめさめぬ みれば月
さやかにして海をてらす 眺望かきりなし
星うすく月すめるよのわたの原八十嶋かけて舟すゝむ也
秋風さつ／＼として浪たかし 帆はまきつ舟はおとりてそ行
からうして室津といふ所に月の山の端ちかく入ほとにとまり
ぬ 十一日ひよりよし 室津をいてぬ むかひは上の関の家々

さかへてひろこれり 長門の領とてたひ人のやかたきはやかにみゆる 上の関を出ぬれはいはう嶋みゆる

さすらへの名のみにきゝしいはう嶋今はさかえて人を住ける

このたひはすはうなたをこす けふは南の風吹て波もしつかにおもしろし

まぢのふくかたほにかけてすはうなた舟は心にまかせてそやる

右に室すみといふ所みゆ 左にうし嶋といふ所あり むかひにへゝのこのしまといふあり

たらちねの牛嶋遠くはなれかねむかひにたつやへゝのこのしま

此辺より波あらくさか波に船をやれば大ゆりにゆりて中々筆とることとかたし 姫島に行なはおひ浪になるへし 舟も静ならむといふ 姫島はかしこにみゆといえとはるかなり いつらくとまちてからうして姫嶋に至 いひしにたかひなく浪少しつかになりてこゝちもならぬ 又西のかたをみれば夕たつ雲のきはひてむかひの山にかゝり雨ふる 今や爰にもきたらむといひて夕立の来らぬやうに歌よめとせめらるゝされといかてかはよむへきおそれたることなればものをもう

はてそあるにやます せめられてくるしくいふこともあらねとつゝしみて

かたわくる夕たちなれはいのるそよ灘こす舟にさわらすもあれ

扱もわひあへることなり 漸時うつりて夕たつ雲は過行ぬされと風かわりて東風になりぬ まほかけて行ことはやけれとゆりゝて静ならず 四方の夕たちの風に帆もさためかねたり 右に長門すゑのみさぎといふ所ちかくみて行 このすさきは海の中に三里ほど流れたるなれはめつらしくみるめことなり 松かしは生て神の御まし鳥居もみえぬ やかてうらのかたをみる おもてにかはらすおなしおもむきにそみゆる左は豊後豊前の山々にて又過行は右にすぎきあり もと山のはなといふ これもすゑのみさぎにつゝきて長きすさきなれとすゑのみさぎよりはみるめおとれり おもてうらとみにる うらには人家あり 日もくれて月に漕 はや灘はわたりすましてかん珠まん珠といふふたつのまろき嶋を右にみて行四方三十五里の灘なれは右に左にかきりなきみ所多し 初夜過る比下の関のあなたにかゝりて月の入て後せとをこさむと潮をまちてそゑにけり 潮なおりて舟を下の関にいるゝほと夜ふかけれはいかなる所をこすともしらす 船もうこかてたゝ

さつゝといふ音はかりして下の関につきぬ 十二日朝のうちみあはせ昼潮にこさむとてまては夕たち四方より来りてこすことかなわす 夜にいりて風浪はなはたしく舟々も打さはく 人音おひたゝし 乗たる舟はとくより心をいれてつなぎぬれば舟々よりもうこかねとおほつかなきほと浪にたゝよふ

めのまえにはしふねの流れきぬれと取人もなし うきぬしつみぬ流れてそ行し 夜も更過て潮風もしつまりぬ 十三日

雨ふれとも舟をいたす 下の関を出ぬれはさゝ木かんりう嶋めのまえにみる 左に大里の塘あり 松のなみ木しけく長く

つゝきてみるめ興あり 小倉のたひやかたあり 筑後の船場あり むかしいつれの御時にやすへらきのみゆきありしより

大里といひ侍るとなむ 筑前の水かみといふ寺の神子尊大和尚と申奉るは安徳天皇にてましましけるとかや 宝物もあり

とそ 船人のつたえてかたれはまこといなやをしらす めうつしに小倉の城下天守もみゆる 玄海灘口右のかたにみて行

黒崎の帆柱山みゆる ふもとに水晶おほしとそ ひとつ得

させよと船長にいへはとまり給ひなは取てまいらせむといえ

といそぎたてはかひなし 豊前を過て筑前の国に至 なこや

のはなに明神の鳥居海の中にたてり みるめふかし 右のかたわかまつといふ所にうらもる人をすへ置し所あり 船長舟

つけてあかる 左に松竹生し浜辺あり 海の中島なり むかし筑前の家臣三宅わかさとかやいひし人の住し所とそ 舟をしめくりて黒崎につきぬ 潮まちて日くれてそあかりぬ

西浜のあま

書記



「舟路往還記」について

荒井 澄子

東京「桂の会」で、熊本大学附属図書館・永青文庫所蔵の「舟路往還記」を解説した。「舟路往還記」には、上巻（五四丁一丁二十行）と下巻（十丁一丁二十行）があり、自筆本か写本かどうかは不明である。上巻は、東北大学附属図書館の狩野文庫にも、「船路の記」として収められている。字体は永青文庫の方が大きく、原本に近いものと思われる。狩野文庫の字体は小さく男文字かと思われ、明らかに写本である。

一 「舟路往還記」の作者について

この紀行の作者については、狩野文庫の「船路の記」の後書に次のごとく記されている。

此紀行は真光院妙実乃著す所なり此人慎庵菰先生の嫡女也柏原氏に嫁して寡となり節を守りて膏沐を用ひす六十餘歳の時上京あり此記を作る故ありて 仙洞 明和天子 乃睿覧を経ると云今慈享和癸亥年八十六 猶無恙

種。享和三年（一八〇三）八十六才なので生をうけたのは享保二年（一七一七）と思われる。嫁ぎ先の柏原氏は熊本藩士。永青文庫の「先祖帳」によると柏原家は五百石取。肥後先哲偉碩の菰慎庵の項に「長女柏原弥七郎に適く、婦徳ありて、学を好み、歌を善し、弟孤山と相唱和す」とある通り、弟達の活躍から察するに、姉である妙実も教養高く、武士の妻として母として一家を立派に支え、幼くして父を亡くした実家の弟妹達の世話もしたと思われる。菰孤山は姉のことを、此紀行文の序文の中で平安時代の歌人檜垣姫とくらべて「檜女淫妓實亂風化柏母守寡志如冰霜」と記している。

二 「舟路往還記」の内容

上巻は、真光院妙実が六十余才の時の紀行文である。これによると、妙実は京都の御所に仕えていた親しい知人に会いに、天明期（一七八〇年代）四月に熊本を出発し、豊後国鶴崎から乗船、瀬戸内海の各地に立ち寄り、寺社を参拝したりして五月初めに上京した。そして約五十日後、帰路につき瀬戸内海を再び船で旅し、小倉路を通って、七月中旬筑前の国黒崎に着いたところで終わっている。京都の知人を通して、往路の紀行を和歌・書道にすぐれていた太上天皇（最後の女

これは作者の弟である菰孤山の遺稿にある記の序文を参考にしたものと思われる。真光院妙実については人名辞典等には出てこない。『国書人名辞典』・『三百藩家臣人名事典』・『肥後先哲偉蹟』から父や兄弟について調べ、妙実の太要を述べる。

父は菰慎庵（やぶ しんあん）元禄二年（延享元年（一六八九）一七四四）。五十六才で没。熊本藩の三代藩主細川綱利、四代宣紀に仕えた三百石取の藩士で朱子学者である。母は藩士稲津氏。第四人、妹四人の九人姉弟の長女。弟の中で長男市太郎（槐堂）は寛政元年（一七八九）六十一才で没。熊本藩の宝歴の改革にかかわり大いに職務をつとめた。次男の弟菰孤山については、岩波の『国書人名辞典』に次の様に記してある。「徳川中期の儒者、肥後熊本藩の学職。享保二十年（一七三五）生る。名は馨、字は士厚、孤山または朝陽山人と號す。孤山は少にして力学し博く経史に渉り、能く詩文を屬した。」兄と共に宝歴の改革で活躍した。六代藩主重賢が開校した時習館の訓導に選ばれ用いられ、助教に転じ、明和三年教授となった。享和二年（一八〇二）没。年六十八。孤山は程朱の学を尊崇し、藩内に広めるのに努力した。四人の妹は各々梶原、香山、戸波、永良氏に嫁ぐ。妙実の名は千

帝一七代後桜町天皇）が御覧になられて「往路有記可無還路之記乎」とのおほめに還路の紀行も書いて御覧いただいた。還路の紀行の方が長文である。

三 「舟路往還記」上巻について

知人に誘われて上京し、その足で伊勢参宮をしようとの動機で熊本を出発し、狼も住んでるだろう阿蘇の二重の峠や久住山の峠をこえて、細川藩の支配地である豊後の国鶴崎から舟路につく。その行路を次に示す。大体現在の地名と同じだが、鹿老渡（広島県倉橋島）を「からふとの浦」、丸亀を「まろかめ」と記したりして、当時の読み方が分って興味深い。

月日	地名	現在の地名
	ふたえ山	二重ノ峠 熊本県
	久住のたうけ	久住山の近くの峠 大分県
四・一五	豊後の国鶴崎	鶴崎
一七	佐賀の関	佐賀関
一八	はやすふの灘	早（速）吸瀬戸
一九	黒白のはま	関（地蔵）崎
	地そうほさつ	〃

二一 灘	伊予灘	山口県	ぬの引の滝	布引の滝	兵庫県
二二 からふとの浦	鹿老渡(かろうと)	広島県	あまか崎	尼崎	兵庫県
二三 火うちのなた	燧灘	香川県	中之島	中之島	大阪府
二六 たとつ	多度津	香川県	六・二三 京	京都	京都府
二七 まろかめ	丸亀	〃	難波かた	大阪	大阪府
四・二七 水島の沖	上水島・下水島	岡山県	帰路		
二八 さぬぎの手しま	讃岐の手島	無人島	七・二 あち河	安治川	大阪府
うしまとのうら	牛窓の浦	香川県	七・三 須磨	須磨	兵庫県
二九 さこし	坂越	兵庫県	まひこの浜	舞子の浜	〃
しよしゃ	書写(書写山)	〃	明石のせと	明石海峡	〃
三十 そねの天満宮	曾根の天満宮	〃	高砂	高砂	〃
高砂	高砂	〃	四 赤穂	赤穂	〃
尾上	尾上	〃	犬嶋	犬嶋	岡山県
五・一 明石	明石	〃	五 備中の水島	備中の水島	無人島
すま	須磨	〃	ひさくのしま	杓島	〃
兵庫	兵庫	〃	三郎といふ嶋	三郎嶋 別名三ツ山	岡山県
五・二 生田	生田神社	神戸市	しら石のせと	白石島	岡山県
			備後の地	備後	広島県

はしり嶋	走島	〃	かうしろ	神代(こうじろ)	山口県
ふく山	福山	〃	十 おはたけ	大島(おおはたけ)	〃
泉水島	仙酔島	〃	小松	小松	〃
瀬の湊	瀬	〃	やなひ	柳井	〃
ともといふ所	瀬	〃	になひ嶋	荷島	〃
六 たしま	田島	〃	室津	室津	無人島
もく嶋	百島	〃	七・十一 上の関	上の関	山口県
七・六 弓削	弓削	愛媛県	いはう嶋	祝島(いわいしま)	〃
いよのいはき	伊予の岩城島	〃	すはうなた	周防灘	〃
七 岩木のみなと	岩城	〃	室すみ	室積	〃
はなくりのせと	鼻栗の瀬戸	〃	うし嶋	牛島	〃
がんだうの嶋	寒戸島(がんどじま)	〃	姫島	姫島	大分県
あぎのみたらひ	安芸の御手洗	広島県	長門すゑのみさき	陶	山口県
八 おんとのせと	音戸の瀬戸	〃	かん珠まん珠	干珠島・満珠島	〃
はつか市	廿日市	〃	十三 下の関	下の関	山口県
みせむ	弥山(みせん)	〃	佐々木かんりう嶋	佐々木巖流島(船島)	無人島
九 宮島のせと	別名宮島	〃	大里の塘	大里	福岡県
すはうの国	宮島	山口県			
くばおかた	玖波小方	広島県			

小倉の城下	小倉	〃
玄海灘	玄海灘	〃
なこやのはな	名護屋	〃
わかまつ	若松	〃
黒崎	黒崎	〃

当時の瀬戸内海の美しい描写の例を二三あげてみよう。弓削島の所では弓削の何某とかいえる富める家が見える。それは三棟・四棟と建ち続いているかわら屋根の立派な建物である。塀は高く島の半ば程を白く塗りつけてあり著しく唐風で出入する人も多い。絵に写せるものならこの素晴らしい有様を筆にしたいがその力がないと記している。広島県の鞆については朝鮮の人がこゝに来て山の高い所から眺望して「日本第一の勝とかきたるふみありとかや おもしろき所から也」と言つたという。又御手洗から音戸の瀬戸にかけては、こういう所に来てこそ天地の広大なることを思いしらるゝとして中国の宋の詩人、蘇軾の表現をかりて「渺たる蒼海の一粟とはむへなり 思ひもたえて詠おれり」と記している。色あざやかに瀬戸内海の様子が目に見えるようである。

幸にして天氣がよいので、「帆たなにあかり山々島々をみる」「とまもふかす臥ながら空をあふきて星をみる也」とある

題で「舟路往還記」と同じ紀行文が掲載されている。巻頭の解説に次の様にある。

「此ひとつのまきは、蘇氏かしははらの母なりし人、御國よりみやこにのぼりしゆきゝの道のことしるし置れしを、つてありて女院の御所につかへさせたまひし、平三位の御かたにまゐり、雲のうへにて御覽せさせたまひ、めづらしとおほせごと有りて、安尾と申し女房のもとより、おほせごとつたへて、しなくたまはりしこと、まことにつくしのはてなる人の、かゝる御めぐみにあふこと、大和歌の徳ならんと、ありがたく、やまと言の葉まねぶものゝ、うちやましからん事と、つたなき鳥の跡に、うつしとどめしものなり。」

「舟路往還記」と「藻屑」は文章の言葉使いなど、殆どちがつている。先ず書き出しは、「舟路」の方が「昔の人の住捨し一草庵の軒のつまに年経て忍ぶつばくらめの志深く思ひ暮せし都の方にいきといふ人にいさなわれて（略）」と旅の動機から記されているのに、「藻屑」は巻頭分の一丁分が抜け、「卯月の望に鶴崎に至りて、其夜舟に乗り港にとまる。月晴れ曇りするも、所がらやうかはるこゝちしてけり。」で始まっている。しかし十八日の項では「ふねの長は島吉、客は難波

るように、対岸の美しい山や島を望んだり星を見ることができた。しかしながら、ひとたび「ひかたにしといふ風に十年に一度吹なり」とあるように、時化で大ゆれにゆれて霧などで視界を遮られたりしたときは、随分心細い思いであったことだろう。潮待ち・風待ち・日和待ちなどの最高のコンディションを狙つての船旅であった。船路にかかる諸費用のこと、船中での食事、身に着けた衣類のこと、京での様子等が記されていたら、江戸中期の旅の姿をより深く理解できたのではないかと思われる。六十才を過ぎてなお、約三ヶ月余の間船旅を続けられる体力には驚かされる。文中所々で和歌を詠み中国歌人の描写を引用しているところなど、当時の武士の妻の教養を伺うことができる。

現在では、新幹線や飛行機で一つ飛びの旅が多く、多島美を称える機会がないが、当時の船旅は、澄み切った空気が海の美しさを満喫できて幸せであったことだろう。願わくば、船で実際この航路を辿ってみたいと思う。

四 「舟路往還記」の異本について

大正八年三月に文芸書院から、古谷知新編で『女流文学全集』全四巻が発行されている。その第三巻に「藻屑」という

の住吉、あはの八木圓 おなじ國の島はあるかたの僧なり。」と「舟路」にはない特定の名前をあげたりしている。この例は他にもみられる。「舟路」にのっている日付や和歌を「藻屑」は省いてもいる。又「舟路」と比べて「藻屑」は文中で意味不明の箇所が多々みられる。例えば「嶋に松も生たるか」を「島にたも生ひたるが」「いよのいはきといふ所につく」を「いよの岩舟といふ所につく」と。「舟路」に文を付け加えたり端折ったりしている所が多い。表現も「舟路」では「舟も波にのりてはおち乗ては落するに」「いつらく」とあるのに、「藻屑」では「舟も波にのりてはたちくするに」「いつかく」と書きかえてある。比較して読むと、「舟路往還記」の方が「藻屑」より自然体である。こうしてみると「藻屑」の原本となつたものが、他にもあると考えられる。永青文庫の他に異本が存在するのかどうかは研究の余地がある。

五 おわりに

妙実が生きた八代から十一代將軍時代、各地で大飢饉や大噴火がおこり、民々の生活を苦しめ打ちこわしが起こっている。熊本藩でも六代藩主細川重賢時代、前々からの虫害や洪

水により財政は窮乏し、経済的に非常に逼迫していたため、宝歴の改革を開始したり、宝歴五年には藩校時習館を開校し、藩財政の安定を図った。弟達はこの改革に参加して苦勞をしている。この中であつて長い間悠々と旅を続け、紀行文を書いたことは、武士の母であり、健康に恵まれ、御所という特別な所に仕えていた親しい知人もいたからであらう。

以前に解読した藤堂嵐子の『薬汐草』では、武士の妻としての心得が細かく述べられており、「三従の教え」を守らなければならず、がんじがらめの生活を強いられている様子が見て取れた。一方この紀行文では、熊本藩士である渡辺氏と旅先でお酒を酌み交わしたり、わらべと語り合ったり、友と楽しいひとときを過ごしたり、途中の島々を眺めては和歌を詠んで心から旅を楽しんでいるおおらかな生活の一面が伺えた。

最後に、永青文庫の方、会員の方々に教えを頂いたことに心から感謝し御礼を申上げる。

参考文献

- 『日本地図帳』 (平凡社)
『島輿大辞典』 (日外アソシエーツ株)

『熊本県大百科事典』

『角川日本地名大辞典』

『姓氏家系大辞典』 (角川書店)

『三百藩藩主人名事典』 (新人物往来社)

『三百藩家臣人名事典』

『肥後先哲偉績』

『先祖帳』 永青文庫

『日本女性人名辞典』 (日本図書センター)

〔住所〕〒165 中野区鷺宮二一九一七